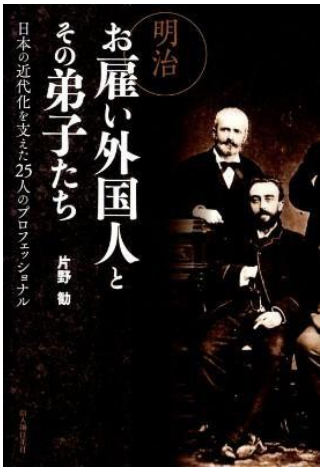
Ｎｏ．４８１【２０２１年１１月１２日配信】
「県都誕生１５０年！！―近代都市への脱皮」展示図書のご案内（担当：鈴木）

市民図書館では、来年 1 月 11 日まで館内展示「県都誕生 150 年!!―近代都市への脱皮」を行っています。今回は、その展示図書から 4 冊をご紹介したいと思います。

まずは、高野澄著『物語　廃藩置県』（2001 年　新人物往来社）です。
江戸時代、全国には約 300 の藩がありました。明治 4 年（1871）の廃藩置県により、まず 3 府 302 県が成立しましたが、同年末には 3 府 72 県に減らされます。その後も数度の統廃合が行われ、道府県がおおよそ現在のかたちに落ち着いたのは明治 21 年のことでした。そして、その過程で消滅した県、復活した県もあったのです。
この本は、全国の 48 の藩について幕末の動乱から県が成立するまでの過程を「物語」として読みやすく書いており、青森県についても「弘前藩」「斗南藩」「館藩」の項で読むことができます。

そして、併せておすすめするのが、植松三十里著『大和維新』（2018 年　新潮社）です。
この小説は、奈良県が舞台です。奈良県も一時期消滅した県のひとつでした。明治 4 年に誕生した奈良県でしたが、同 9 年に西隣の堺県に統合され、さらに同 14 年には堺県が大阪府に統合されたことで、大阪府の一部にされてしまいます。その奈良県を復活させるべく、のちに政治家・実業家になる実在の人物 今村勤三らが「大和の誇り」を胸に、政府に強く働きかけ、明治 20 年に復活を実現させるまでの苦難を描いた物語です。

3 冊目は、片野勧著『明治お雇い外国人とその弟子たち　日本の近代化を支えた 25 人のプロフェッショナル』（2011 年　新人物往来社）です。
この本のおすすめポイントは、お雇い外国人の評伝だけでなく、その師弟関係にも言及している点です。彼らに学んだ日本人の若者たちは、新しい文化をいち早く習得し、それを日本の生活に柔軟に取り入れて近代化を進めました。この本では、彼らと外国人教師・技術者らとの様々なエピソードが語られ、さらにその中からコンドルに学んだ辰野金吾、フェノロサに学んだ嘉納治五郎など多くの優れた技術者・文化人・政治家が育っていったことを知ることができます。



『明治お雇い外国人とその弟子たち』

そして、最後に小説をもう一冊。土橋章宏著『ライツ・オン！　明治灯台プロジェクト』（2014年　筑摩書房）です。著者は、『超高速！参勤交代』などを書いた方です。

明治2年、イギリス人のお雇い外国人リチャード・ブライトンは、外国人同士の軋轢（あつれき）や頑迷な日本の役人との交渉に苛立ちながら、長崎の伊王島灯台の建設に取り組みます。リチャードは、初めのうち野蛮な日本人たちを啓蒙してやるという気持ちでいましたが、日本にも独自の技術や医療があることを知るにつれ、少しずつ意識が変わっていきます。そして、もう1人の主人公、イギリス人を父にもつ青年丈太郎も、リチャードに通訳として雇われたことをきっかけに世界が大きく開かれていくのでした。

ここに登場するリチャード・ブライトンは、日本政府から灯台建設技術者として雇われた実在の人物で、伊王島灯台をはじめ日本に26の灯台を建設し「日本灯台の父」と称されています。明治9年に点灯された青森県の尻屋崎灯台も、彼の設計によるものです。

尻屋埼灯台（昭和30年代、青森県所蔵県史編さん資料）